

## 寄稿：科学技術予測と研究課題探索

今後の科学技術の動向を展望する目的から世界各国で技術予測が続けられている。1997年7月、第6回科学技術予測の結果が公表された。これは5年間隔で科学技術庁が実施しているものであるが、対象分野も材料・プロセス、エレクトロニクス、情報、ライフサイエンス、宇宙、海洋・地球、資源・エネルギー、環境、農林水産、生産・機械、都市・建築・土木、通信、交通、保険・医療・福祉と広く、とりあげられた課題数も1072に及ぶ。



今回の結果から見えてくる特徴は環境、情報分野を重視する視点が強くでていることで、とくに情報分野は重要度100位以内に24課題が並ぶ。前回の第5回では9課題であったことからみて、その急増ぶりは目立つ。反面、生命関連の分野では相対的に重要課題数が急減している。これらの結果を自らの考えと対比させながら検討していくのは一種の知的な刺激があって楽しい。同時に研究者としてこの成果をどのように理解し、活用するかについても熟考の必要がありそうだ。

予測で取り扱われた課題は研究者が思考と検証を試み、すでに研究の芽がでており、実現の可能性もあると判断されたという性質をもつ。いいかえれば、課題選定の段階で成果があいまいなものは排除されるのが通例である。見方をかえれば基礎開拓的な段階の研究課題は含みようがないのである。こう考えてみると、研究者として取り組む課題は技術予測の課題の種をつくる範囲にあると位置づけられそうである。1997年5月、国際生産研究会議を日本で開催するに際して、生産分野の研究エキスパートが内在させている、社会の将来像と研究課題の調査を実施した。そこには、情報化、人間調和化、ライフサイクル化、環境調和化が21世紀初頭のキーワードとして表出した。そして、文化に適應し、リスク回避を念頭においた技術への願望が伝わってくる。研究者への期待は膨らむ。と同時に深い哲理と洞察力と謙虚さがますます要望される中、研究者を支援する財団への期待は大きい。

評議員・岩田一明  
(高知工業高等専門学校長  
大阪大学名誉教授・神戸大学名誉教授)